

書簡における結婚の語りと交換構造

——『二人の若妻の手記』を通して——

谷 澤 真 優

はじめに

『二人の若妻の手記 (*Mémoires de deux jeunes mariées*)⁽¹⁾』は、パリ貴族の娘ルイズと地方貴族の娘ルネという二人の女性の往復書簡を中心とした多声型の書簡体小説であり、これらの手紙を通して、修道院を出た若い娘たちが結婚を経て妻として、あるいは母として生きる半生が描かれる。本稿は、これらの手紙の分析を通して、結婚の交換制度に組み込まれた女性たちがその現実と向き合う方法の一つを明らかにするものである。

そのため、前提として、まずはルイズとルネがそれぞれどのような条件で結婚することになるのか、婚姻契約とそれに関する周辺人物の言葉を通して確認する必要がある。二人とも貴族の生まれでありながら十分な持参金を持たない娘たちである以上、婚姻契約を通して、金銭に代わって彼女たち自身に価値を付与されることが明らかになるだろう。次に、そのような結婚の経済的現実を彼女たちがどのように受容するのかを見ることになる。とりわけルイズとルネが書簡において結婚（生活）について語る箇所に注目し、彼女たちが用いる語彙やレトリックの傾向からこれを読み解く必要があるだろう。この結婚という各々の現実の受容の仕方は彼女たちの間で大きく異なるため、最後に、結婚生活や妻の役割についての異なる実践に対して彼女たちがどのような反応を見せるのかを確認することになる。結婚や夫婦関係に関する考え方の相違が時に相互的な批判に至ることは一読すれば明らかではあるものの、本稿ではその際に双方が用いる「クルチザンヌ」という語に特に注目する。

1. 結婚の交換構造

彼女たちの置かれた状況を簡潔に確認しながら、ルネとルイズのそれぞれの結婚の条件を検討してみよう。まず、既に述べた通り彼女たちはともに持参金のない娘たちであるが、その理由も概ね共通している。それは娘ではなく息子の世襲財産を確保したいという両親の意向であり、このためにこそ彼女たちは幼いうちに修道院に「厄介払い」される。その後、ルネは生家に呼び戻され、両親が整えた縁談を受けるか修道院に戻るかの二択を迫られ、病を理由にパリへ帰ったルイズもまた適切な結婚相手を見つけることが出来なければ修道院に戻る他ない。ところで、

持参金なしでの結婚が実際に成立する以上、彼女たちに財産とは別の価値が見出されているという事にならないだろうか。簡潔にそれを確認しておく必要があるだろう。

ルネの結婚の方は利害に基づく取引の側面が比較的強い。それは、単に彼女の結婚が両親によって当人の意志と関わりなく決定されたものであるからというだけでなく、彼女の夫に定められた同地方の貴族ルイ・ド・レストラードが、こう言ってよければ、あまり将来有望な男性とは言えないからでもある。というよりも、ルイの父であるレストラード男爵が持参金なしという条件でもルネを息子の嫁に求めたのは、まさにルイが戦地での悲惨な経験のために野心も生気もないといった状態にあったからにはほかならない。持参金のない娘と将来性のない青年のこの結婚は、だから、「栄えあるド・レストラード家の存続のためにあなたが必要なのよ、それが全てよ。」(p.228) というルイズの的確な推測に要約される。

それでもこの契約にルネの意志が介在するとすれば、それは、その同意の瞬間においてである。ルイズに自身の結婚を知らせる手紙で、「[...] 私はド・レストラード夫人になること、25万リーヴルの持参金をつけてもらうことに愛想よく同意しました [...]。」(p.220) とルネは説明している。この「25万リーヴルの持参金」とは、亡きレストラード男爵夫人の遺産であり、持参金を用意できないルネの両親に代わって夫側の家がこの財産をルネ名義の持参金として扱うというのが、レストラード男爵の提示した婚姻契約の内容であり、要するに、ルネの家は持参金を用意することなく娘を嫁がせることが出来る。

ところで、レストラード男爵が哀れな息子の妻としてルネを選んだのは、「彼 [= 息子] を結婚させる、それも貴族の若い娘と結婚させるという考えた一つ (p.219)」によってである。つまり、貴族という社会的地位と若さ、この二つは、ルネに見出された妻としての価値に付与された一種の値札にはほかならない。結婚と持参金を受け取ることへの同意を並列して語っている通り、ルネにとってもこの結婚は、若さと社会的地位に還元され、金銭に換算された自身の価値を受け入れることなのである。『三十女 (La Femme de trente ans)』ではヒロインのジュリー・デグルモンが、持参金の多寡によって結婚が決定されるような婚姻制度の状況を「人間市」« bazar humain » と批判して嘆いていたが、持参金のないルネの婚姻の場合、売買の構図はより一方的なものに見える。その点で、持参金のない彼女は、持参金のある娘たち以上に「商品」化されていると言えよう。

(1) 本稿における『人間喜劇』作品からの引用は全て Honoré de Balzac, *La Comédie humaine*, édition sous la direction de Pierre-Georges Castex avec la collaboration de Pierre Barbéris [et. al.], Bibliothèque de la Pléiade, 12vol., Paris : Gallimard, 1976-1981. に基づく。『二人の若妻の手記』に関しては本文中に括弧で頁数のみを表記、その他の作品に関しては脚注にて作品タイトルと巻数、頁数を表記する。引用中の斜体は、原則として筆者による強調である。尚、フランス語の引用は原則として筆者の訳によるが、既存の邦訳（加藤尚宏・芳川泰久訳、『二人の若妻の手記』バルザック愛の葛藤・夢魔選集②、水声社、2016年。）を適宜参照した。

ルネとは対照的に恋愛結婚を果たすルイズも、やはり結婚制度の交換構造から逃れたとは言いがたい。彼女もまた持参金なしで結婚しなければならないにもかかわらず、公爵令嬢という立場上、結婚相手の身分を選ぶことも求められるが、「高位貴族の娘を妻として求めながら、持参金がないのにあると認めてくれるような男性にフランスで出会うことは出来ないのだよ」(p.244)というルイズの父の言葉は、そのような結婚の難しさをよく説明している。それでもルイズが恋愛結婚を果たすことが出来るのは、彼女を神格化し、盲目的に愛する恋人マキュメール男爵が持参金の受取辞退を約束するからにはほかならない。とはいえ、二人の間にあっては純粋で無償な愛も、婚姻契約においてはそうとは言い難い。

二人の結婚を認めたルイズの母、ショーリユー公爵夫人の言葉にこのことがよく表れている。マキュメールが持参金をルイズの財産として認めるが受け取らないという契約書に署名すると、公爵夫人は娘に対して次のように述べる。

一家の主婦として素晴らしい生活をお前にさせてくれるたった一人のスペイン人を見つけ出したわね。可愛い子、チュリアがお前の兄にするみたいに、お前もあの人を上手く扱ったものね。

Aussi as-tu avisé le seul Espagnol capable de te faire la belle vie d'une femme maîtresse chez elle. Ma chère petite, tu l'as traité comme Tullia traite ton frère. (p.300)

ここに名前を挙げられたチュリアは『人間喜劇』に登場する踊り子であり、ルイズの兄であるレトレ公爵の熱愛を受け経済的支援を受けていることから、この二人の間では、したがって愛と金銭の交換が成立していると言ってよいだろう。ところで、ルイズは自分に相応しい結婚相手を見つけることが出来なければ、父のスペイン駐在に同行しそこで結婚するか、あるいは修道院に戻るほかない。つまり、彼女もまた、自分の人生を生きるためには夫という名の経済的・政治的庇護者を必要とするのである。そして、ルネが義父によって若さと社会的地位にその価値を還元されたのに対して、ルイズは自らに付与した愛という価値によって結婚の交換条件を成立させる。また、レトレ公爵がチュリアを繋ぎとめるために金銭的支援を行っていたとすれば、愛するルイズを生涯の伴侶とするために持参金という潜在的な利益を辞退するマキュメール男爵もまた、金銭と引き換えに愛を獲得したと言って良いだろう。公爵夫人がチュリアの名を挙げるのは、二人の間では無償の愛が、婚姻契約にあっては金銭との交換可能物としての価値を持つことを指摘するものにほかならない。

2. 書簡の語彙とレトリック

結婚制度によって、多かれ少なかれ、金銭との交換構造の中に組み込まれた二人の娘たちは、

この現実を互いへの手紙においてどのように綴るのか。ルイーズとルネの手紙は、ただそれぞれが描く内容の違いのみによって彼女たちの対照性を強調するのではない。柏木隆雄が指摘するように、バルザックはルイーズとルネを明確に書き分けており、彼女たちの手紙に用いられる語彙にもそれぞれの傾向が認められる⁽²⁾。手紙を書くということが、それぞれの現実を自らの言葉で再構成する行為であるとすれば、結婚や夫婦生活に関する書簡の語彙やレトリックにより注目することで、結婚制度の交換構造に対する彼女たちの姿勢と受容の仕方の差異を明らかにすることが可能になるのではないだろうか。

2-1 ルネの場合：経済的語彙と母性

まずルネの手紙の特徴として、結婚や結婚生活に対する経済的な語彙の多用が挙げられる。彼女の結婚は家同士の極めて経済的な取引の一種であるが、その点についてルネは極めて自覚的であるように見える。例えば、ルイーズより一足早く結婚したルネは、この未婚の友人に対して「撤回できない結婚という危険な契約」*« [au] dangereux marché d'un irrévocable mariage »*に「保証もなしに」*« sans arrhes »* 乗り出さないようにと忠告している (p.279)。一時の恋愛感情だけで結婚を判断しないようにという助言であるが、ここに用いられる経済的語彙は、逆説的に、自身の結婚に対するルネの考えをよく表しているように思われる。まず、一般的に「婚姻契約」を指す場合、「契約」には *« contrat »* が使用されるが、ここで用いられる *« marché »* は契約の中でもとりわけ売買取引に関わるものを指し、他に「市場」の意味を持つ。また、「保証」と訳出した *« arrhes »* も「手付金」を意味する語であることから、ルネが婚姻契約を売買契約に接近させて語っていることは明らかである。これらの売買に関わる語は、婚姻契約の強い拘束力と売買取引的側面とに対するルネの理解の表れにほかならないと言ってよいだろう。結婚生活初期の手紙にある「以前私はひとりの人間でしたが、今はひとつの物に他なりません！」(p.278) という悲痛な嘆きは、この契約によって、自身が金銭との交換可能物として構造の中に組み込まれたことへの自覚を示すものではないだろうか。

このように語られるのは結婚契約そのものだけではない。彼女の最大の特徴であり、ルイーズと彼女を最も差異づける物である母性もまた、経済的な語彙によって二重化される。結婚して間もなく、彼女は母親になるという願望について、次のようにルイーズに次のように書き送っている。

神様とあなたと私の間の秘密になるこれほどの犠牲の成果を私は待っているのです。母性とは一つの企てであり、私はそれに多大な信用貸しをしたのです。今日ではその貸しがあま

(2) 柏木隆雄「*Mémoires de deux jeunes mariées* 小論」、『大手前女子大学論集』、第8号、1974年、110頁。

りにも大きいので、十分に返済されないのではないかと心配しています。母性には、私のエネルギーを引き出し、心を広げ、限りない喜びによって私に報いる責任があるのです。

J'attends *le fruit* de tant de *sacrifices* qui seront un secret entre Dieu, toi et moi. La maternité est *une entreprise* à laquelle j'ai ouvert un *crédit énorme*, elle me doit trop aujourd'hui, je crains de *n'être pas assez payée* : elle est chargée de déployer mon énergie et d'agrandir mon cœur, de *me dédommager* par des joies illimitées. (p. 280.)

ここで語られているのは、夫に対する現在の献身と努力が母親としての幸福によって将来的に報われることへの期待である。だが、語彙の水準に注目してみると、この結婚生活に苦悩する妻の切実な願いは極めて資本主義的な語彙によって二重化されている。

まず、彼女が母性について用いる「*entreprise*」は「企て、計画」を意味する一方で、経済的に「事業」を指す。確かに女性にとって出産は人生を賭けた一大事業と言えるかもしれないが、これに連なる「私は多大な信用貸しをした」や「貸しが大きい」といった表現は明らかに金融的な意味合いを持つ。そして、母性に対して彼女が抱く期待もまた、「返済する」*« payer »*「補償する」*« dédommager »*等の貸借に関わる動詞で示されている。妻としての苦労を母としての幸福によって贖われたいという心理状況が長期的な投資のイメージで描かれていることは明らかである。そして、この投資というイメージに従って言えば、夫に対するルネの妻としての絶え間ない献身は、本当の意味での犠牲や献身ではない。引用部では「これほどの犠牲」であり、「多大な信用貸し」と呼ばれるこの献身は、彼女自身が未来に母性を獲得するための一種の先払いに過ぎない⁽³⁾。また、「投資」である以上は、その成功がもたらす見返りは、当然ながら、この「貸し」を補ってあまりあるものでなければならない。ここに、不本意な結婚に身を投じながらも、その制度内で自身の幸福を獲得しようとするルネの意志を垣間見ることが出来る。

実のところ、母性を叶えるための手段に過ぎないこの献身もまた、既に疑似的な母性によって裏付けされている。家父長制社会の規範に沿った夫婦関係を目指すルネの努力は枚挙に暇がないが、とりわけ重要なのは、ルネが幻想の夫婦愛によって夫を導く点にある。夫ルイに対する彼女の感情は友愛と尊敬に留まるにもかかわらず、一家を支えるに足る男性として夫を再起させたいルネは、この誤解を敢えて否定することなく、むしろ幻想をそのまま彼に抱かせておくことを選

(3) しかも、この「事業」において夫は二次的な役割しか持たない。引用部に「神様とあなた [=ルイズ] と私の間の秘密になるこれほどの犠牲」とあるように、献身の対象である夫には、それが「犠牲」であることさえ秘匿されている。実際に彼女に幸福を返すのはあくまで母性の喜びであって、夫はそれに不可欠な存在であるとしても、幸福の源としては書かれていない。実際、彼女が妊娠を知らせる手紙では、「私の妊娠を知って、ルイも私と同じくらい驚いていました。[...] ねえあなた、偶然とは母性を司る神なのです。」(p.311)とあり、妊娠における夫の存在は希薄であるように見える。この意味で、夫は彼女にとって一つの手段であるとも言えるかもしれない。

ぶ。幻想の維持という努力が、ルイズへの手紙では次のように書かれている。

彼 [= ルイ] は幸福で、自分一人で花を摘むのですけど、それを咲かせる大地の努力には気を留めないのです。幸せなエゴイズムね！それが私には高くつくとしても、私は彼の幻想の方に自分を合わせます。自らくたくなになりながらも子供を喜ばせようと母親するみたいだね、私の考える母親像に従えって言えば。[...] だから、私たちの家の中で私が彼に使う親しみを込めた呼び名は、「私の坊や！」なのです。

[...] il est heureux, il cueille à lui seul les fleurs, sans s'inquiéter des efforts de la terre qui les produit. Heureux égoïsme ! Quoi qu'il puisse m'en coûter, je me prête à ses illusions, comme une mère, d'après les idées que je me fais d'une mère, se brise pour procurer un plaisir à son enfant. [...] Aussi, le nom d'amitié dont je me sers pour lui dans notre intérieur est-il : « mon enfant ! » (p.280)

夫に愛という幻想の花を握らせておくためのルネの献身が、ここでは子どもに対する愛情深い母親のイメージで説明されている。このイメージは、後に三人の子どもを持ったルネが身を持って体現することになる母親像の先取りでもある。彼女は実際にそのような母親になるのだ。したがって、問題になっているのはあくまで夫婦間の愛（という幻想）でありながら、ここで本質的に語られているのは明らかに夫婦というよりも母子の関係である。実際、夫に対するルネの母親的姿勢は、結婚生活のごく初期の段階から既に認められる。例えば、夫からはじめて愛と感謝の手紙を受け取った際には、彼女はそれをルイズへの手紙に一部引用しつつ、「ねえあなた、私はこんな風に彼を育成しているのよ。」(p.258) と締めくくり、自身が夫を「教育」する立場にあることを仄めかす。また、ルネは夫との個人的な約束によって、彼女が自主的に身を委ねるまで性関係を一定期間保留している。これらのことから、どちらかといえば疑似的な母—息子関係の成立が妻—夫の関係に先立っているように思われる⁽⁴⁾。既に見たように、ルネは自分自身の子の母として幸福を獲得するという目的を長期的な事業投資のイメージで語っていた。だとすれば、愛という幻想の形で発揮されるこの疑似的な母性は、この事業における、言わば「元手」にあたる。

だが、それは一体どこから生じたものなのか。ここで、ルネが結婚に際して25万フランの持参金をレストラード家から与えられたこと、その財産が亡きルイの母の遺産から成るものであったことを思い出したい。既に故人であるために、レストラード男爵夫人についての描写は極めて少

(4) 性関係の留保については、『結婚の生理学』(1829)で指摘された初夜の危険を回避しうする妙策でもある。詳細は Kristina Wingård, *Les problèmes des couples mariés dans La Comédie humaine d'Honoré de Balzac*, Stockholm: Université Uppsalla, Almqvist & Wiksell, 1978. を参照のこと。

ない。ライブツイヒにてルイがロシア兵に囚われたことを知り、その悲しみのために病死したというのがほとんど唯一の情報である。ルネの手に渡ったのは、この愛情深い義母の死から生じた遺産である。だから、この財産はある種の両義性を帯びる。既に見た通り、これは「若い貴族の娘」という価値に付された値札の類であると同時に、息子を想う母の愛の悲痛な結果でもある。だからこそ、もしルネが不本意な結婚に終始しかねない状況を打破しようとしたとすれば、あるいは、若さと社会階級とは異なる自身の価値を結婚生活の中で模索したとすれば、この数字に彼女は母性を見出すことになるだろう。投資家の野心に重ねられた母性への意志は、ルネが単に彼女の婚姻契約を規定していた市場原理に絡めとられたままではないことを意味するように思われる。「投資」として行われる夫への献身、これを可能にする疑似的な母性の源泉は、まさにこの金銭によって象徴的に媒介されたものなのではないだろうか。

実際、第一子の妊娠・出産を経ると、母性に対するルネの語り方は一変する。夫への献身が見返りを前提とした「投資」であったのに対して、子どもに対する愛はほとんど無償の愛である。自己犠牲の苦痛さえもが母親だけの感じることの出来る喜びとされる。出産による自身の変化について、彼女は次のように書く。

私の心、魂、存在、見知らぬ私が、それまで苦しんでいた灰色の殻の中で目覚めさせられたのです。まるで太陽のきらめく呼びかけに向かって花が種子から飛び出すように。

Mon cœur, mon âme, mon être, un moi inconnu a été réveillé dans sa coque souffrante et grise jusque-là, comme une fleur s'élance de sa graine au brillant appel du soleil. (p.320.)

発芽や孵化のイメージは、明らかに誕生を意味するものである。子どもを産むことによって、ルネはそれまでの自分とは全く異なる「見知らぬ私」になる。つまり母という新たなアイデンティティを自ら生み出すのである。この一種の生まれ変わりの作用は、ルネだけでなく、他の人間に対しても及ぶ。

老レストラード氏とその息子は私に旧を倍する思いやりをかけてくれて、まるで私が彼らにとって新しい人間になったみたいです。[...] 老いた義父は、子どもになってしまったように思われます。だって、私をうっとりと見つめるのですもの。

Le vieux l'Estorade et son fils ont redoublé d'ailleurs de bonté pour moi, je suis comme une nouvelle personne pour eux [...]. Le vieux grand-père devient enfant, je crois ; il me regarde avec admiration. (p. 322.)

義父でさえ、ルネの母性を前にしてもはや老いたままではいられない。ルネはもはや彼にとっ

て「若い貴族の娘」ではない。彼女はもう、誰にとっても、金銭との交換可能物ではないのである。手紙に綴られていた経済的語彙と投資のイメージは、ルネが婚姻契約によって付された自身の経済性を、母性という別の方向へ差し向け、最終的に昇華する一種の試みと捉えることが可能なのではないだろうか。

2-2 ルイーズの場合：愛のレトリック

ルネの手紙が昇華の過程であったとすれば、反対に、ルイーズはその語りにおいて結婚の経済的側面を徹底的に捨象しているように見える。無論、彼女が婚姻の経済的・政治的要素についてまったく無知というわけではない。彼女が貴族相手と持参金なしの結婚をしなければならないことは、既に見た通り、ルネへの手紙の中でも明示されている。しかし、それらのほとんどはあくまで父ショーリユー公爵の言葉として、文字通り括弧付きで書かれている。既に見たように、ルイーズとフェリペの結婚における交換構造の指摘も、母ショーリユー公爵夫人の言葉として書かれていた。要するに、ルイーズは結婚の経済性・政治性を認識しつつも、彼女の語りは結婚のこうした側面からある程度距離を取っている。その代わりに結婚に関するルイーズ自身の言葉として書かれるのは、主に愛や幸福である。この表裏一体の傾向がもっともよく表れているのが、彼女が部屋の窓越しに、マキユメールに結婚を提案する時の言葉である。

「フェリペ、愛しい人、私は今この瞬間から、私ただ一人の意志によって、あなたの妻です。明日の朝、父に私との結婚を求めに行ってください。父は私の財産を残しておきたいの。だけど、私の財産を認めはするが受け取らないと契約で誓えば、あなたは間違いなく認めてもらえるでしょう。私はもうアルマンド・ショーリユーではありません。だから、急いで降りて。ルイーズ・ド・マキユメールともなれば、どんな軽率な言動も犯したくありません。」
[…]「つまり、私は愛されている」と私は思いました。「どんな女性も今まで愛されたことがないくらいに。」

« Felipe, mon ami, je suis par ma seule volonté votre femme dès cet instant. Allez me demander dans la matinée à mon père. Il veut garder ma fortune ; mais vous vous engagez à me la reconnaître au contrat sans l'avoir reçue, et vous serez sans aucun doute agréé. Je ne suis plus Armande de Chaulieu ; descendez promptement, Louise de Macumer ne veut pas commettre la moindre imprudence. [...] Je suis donc aimée, me suis-je dit, comme une femme ne le fut jamais ! » (p.295.)

既に確認した通り、ルイーズは持参金なしで貴族の男性と結婚しなくてはならないため、彼女は実質的に持参金を払わずに結婚する方法を提示している。財産という現実的な問題を無視でき

ないことを彼女がよくわかっていることの証左である。しかし、財産を重視する主語は「私の父は」であって、彼女自身ではないことから、やはり持参金の問題は外部の声として提示されていると言える。また、持参金の話の前後には、これを挟むように、高らかな愛と結婚の宣言が彼女自身の言葉として置かれているにも注目したい。

前半は「愛しい人」という親しい呼びかけで始まり、これに「私は今この瞬間から、私ただ一人の意志によって、あなたの妻です。」という結婚の意思表示が続く。とりわけこの「私ただ一人の意志によって」は、結婚をルイーズの自発的な意志に基づくものとし、単なる制度的契約の枠組みから引き離すものである。正式な契約でないものの、それは二人の関係を定礎する一つの宣言にほかならない。その意味では彼女たちの結婚が本当の意味で成立するのは、ルイーズの言う「今この瞬間から」と言ってもよいかもしれない。実際、持参金に関する説明の後では、「私はもうアルマンド・ショーリユーではありません」「ルイーズ・ド・マキューメールともなれば」とある通り、ルイーズは姓を早速変えて名乗って見せる⁽⁵⁾。これもまた一つの結婚の宣言であり、その提案に現実性を与え、半ば既成事実化するものであると言えよう。彼女の自発性に基づいた結婚の意思表示とその反復に挟まれて、最も重要であるはずの持参金の問題は限りなく希釈される。フェリベが持参金の受取拒否という形でルイーズの父を納得させ、彼女の夫として認められること、それはもはや、ルイーズの宣言によって今しがた成立した結婚を公的なものにするための事務的な手続きに過ぎないようにさえ見える。

そして引用部の最終文では、結婚と持参金の所有権放棄を承諾したマキューメールが去った後、一人残されたルイーズの「つまり、私は愛されている」という強い実感の言葉がその動機として愛の存在を強調する。彼女の自発性を示す言葉が、マキューメールに対して、持参金の放棄をその手段として位置付けるとすれば、これに対する彼の同意は、ルイーズ自身の内で、「愛」という言葉によって意味づけられる。彼は私のことを愛しているから、本当に愛しているから、だから持参金など求めずに結婚を選んでくれる。端的に言えば、これこそが結婚に関するルイーズの語りの中で用いられるレトリックは、このようなものに他ならない。結婚の経済的条件が彼女の結婚にあたって重要な問題である事実は変わらない。しかし、彼女の語りにおいては、一方ではルイーズの自主性に裏付けられた結婚の意志が、もう一方では利益を度外視するマキューメールの愛が、持参金の放棄という契約を予め動機づける。ルイーズ自身の言葉による二方向からの意味付けによって、婚姻における財産の重要性は限りなく希釈される。これらのことから、愛を前面に押し出すことでその背後に結婚の経済性を退却させるレトリックこそが、ルイーズの語りの特徴と言えるだろう。彼女にロマネスクという形容を与えるのは、まさに彼女自身のこの話法では

(5) 彼女のフルネームはルイーズ＝アルマンド＝マリー・ド・ショーリユー (Louise-Armande-Marie de Chaulieu)。

ないだろうか。

ルイズの手紙の傾向は二度目の結婚においても変わらない。大きな違いは、かつてのマキユメールのように、今度はルイズの方が一身に愛を捧げる側に立つ点である。夫の病死で一度目の結婚生活が幕を閉じてから数年後、彼女は無名の詩人マリー・ガストンと密かに結婚する。それにあたって、彼女はガストンが抱えていた多額の借金を代わりに返済し、彼の名義で年金を設定し、生活費を与える。二人の愛の住処となるパリ近郊の山荘の建設、趣をこらしたその内装、美しい庭園を賄うのもルイズである。そのために、彼女はマキユメールの遺した不動産を売却し、国債に替え、パリ社交会や貴族社会から姿を消す。一連の売買によって準備されたルイズの再婚は、一度目の結婚と同じく金銭と愛の交換構造の上に成る。踊り子とパトロンを思い起こすならば、今度はルイズが後者の側に立つことになる。だが、こうした経済的庇護はガストンにとって純粹に喜ばしいものではない。彼が結婚の際に友人に宛てた手紙には、「僕は屈辱を感じています、この屈辱が僕の愛の証であるとはわかっていながら⁽⁶⁾。」とある (p.369)。ルイズの経済的な寛大さは、彼にとっては一種の負債であると言えるだろう。しかしながら、ルイズの方はこの構造に無頓着である。ルネに再婚を知らせる手紙では、貴族社会からの引退や財産整理等の一連の行動は、やはり愛によって説明されている。

ああ！私の行動の理由は、あなたの炯眼や繊細さ、好奇心旺盛な優しさからも逃れていましたが、その謎を説明する時が来たのね。パリの近くのある村で私は結婚するの、ひっそりとね。私は愛しているし、愛されています。愛の何たるかを知る女性が人を愛するのと同じくらい、私は愛しています。そして、自分を熱愛する女性を男性が愛さなければならないのと同じくらいに、私は愛されています。

Hélas ! le moment est venu de t'expliquer les mystères de ma conduite, dont les raisons fuyaient ta perspicacité, ta tendresse curieuse et ta finesse. Je me marie dans un village auprès de Paris, secrètement. J'aime, je suis aimée. J'aime autant qu'une femme qui sait bien ce qu'est l'amour peut aimer. Je suis aimée autant qu'un homme doit aimer la femme par laquelle il est adoré. (p.360)

親友ルネにさえ秘密であった財産整理と貴族社会からの引退の理由として、初めて再婚が引き合いに出される。だが、その報告に続いてすぐさま「愛する」「愛」「熱愛する」等が繰り返されることから、語りの中心は再婚というよりも愛の方にある。「私は愛しているし、愛されていま

(6) 尚、この直前の二文も「僕は屈辱を感じています」« Je suis humilié »から始まるため、連続して三度反復されていることになる。

す。」という文が示す通り、ルイズにとって二人の愛は対になる双方向性のものである。そして、直後、この構文が二文に分解され、それぞれの愛が考えうる最大限のものであることが比喩的に説明される。彼女にとって、この結婚は調和のとれた愛の交換によって成立するものだと言えるだろう。しかしながら、引用部最後の二文において、彼女は夫に与える愛を可能動詞 « pouvoir » で表現し、夫が彼女に向ける愛については義務を意味する動詞 « devoir » を用いている。つまり、ルイズは夫に注ぐ愛のお返しとして同等の愛を欲している。その意味で、愛は返済すべき一種の負債であり、この手紙はある種の売買契約書の様相を帯びる。ガストンがルイズの経済援助に負い目を感じているだけに、彼の抱える感情的負債は大きい。と言えるだろう。しかしながら、ルイズはこうした点に無意識であるどころか、愛と金銭を完全に切り離そうとさえしている。

あなた、愛するって大変な仕事だから、愛したい人間は他の仕事を持つべきではないのです。お金はもう私にとって心配事じゃなくなるでしょう [...]。私の唯一の気がかりは、彼に好かれて、彼を愛して、卑俗な人たちには非常に単調に見えるものに多彩さを投げかけることになるの。

Ma chère, aimer est une grande affaire, et qui veut bien aimer ne doit pas en avoir d'autre. L'argent ne sera plus un souci pour moi [...]. Ma seule occupation sera de *lui* plaire et de l'aimer, de jeter la variété dans ce qui paraît si monotone aux êtres vulgaires. (p.366)

[斜体は原文による]

マキュメールによる持参金の辞退が彼女にとって究極の愛の証明だったように、ルイズにとって金銭は、犠牲にすることによってのみ愛の証明に寄与するもののようである。実際、先んじてなされたこれらの出費のお陰で、再婚生活において金銭の問題は姿を消すように見える。ルイズは管理すべき領地も邸宅も他に持たず、詩人として名の売れ始めていたガストンも収入を得るための詩作をやめる。資本主義化する社会から隔てられた山荘は、労働も金銭もない、愛だけに満ちたユートピアと化す。しかし、当然のことながら、二人の再婚自体がその上に成立する以上、金銭と愛の交換構造は消えてなくなるわけではない。ルイズの目に不可視化されただけで、常に存在し続けている。この構造が再び露呈するのが、寡婦となった兄の妻子が身一つでパリにいることをガストンが知った時である。ルイズに対して密かな負い目を抱えるガストンは、自分一人の力で亡き兄への恩を返そうと再びペンを執り、結婚の時にルイズから貰ったまま放置していた生活費と自身の劇脚本の報酬で義姉たちの生活を整える。ルイズが捨象してきた結婚の経済性を否応なく露呈させ、このユートピアを彼女の墓に変えるのは、突然執筆に励むガストンを見た時の「『彼にはお金が必要なのだわ!』」(p.391) という気づきにほかならない。

このようにルイズの語りの前面には常に愛が置かれている。一度目の結婚では、両親やパリ貴族社会といった外部の声として愛と金銭の交換構造を彼女自身もある程度認識しつつ、愛について書くことでそれを捨象していた。ところが、ルネが結婚制度に潜む市場原理を語りの中で利用し、それによって母という新たな価値を自身に見出したのとは反対に、交換構造は語りの中でのみならず、徐々にルイズの現実の生活においても不可視化されていく。

3. 「クルチザンヌ」の意味の焦点

ここまで、ルイズとルネの手紙における語りの特徴を見てきた。彼女たちがその経済的・政治的取引現実を認識しながら結婚を語る方法には随分と違いがあったように思う。このような語りの差異は、結婚制度に潜む交換構造あるいはそれによって彼女たちに付与される交換価値に対するリアクションの差異にほかならない。ところで、この差異を示すのは、語彙やレトリックだけではない。彼女たちが互いを批判する際に用いる「クルチザンヌ」*courtisane* という語には、結婚に対する彼女たちの姿勢が反転した形で表れているように思われる。

所謂「高級娼婦」を意味する *courtisane* の語は、作中でそれほど多く用いられるわけではない。それでもこの語が注目に値するように思われる理由が二つある。何よりもまず、ルイズもルネもクルチザンヌではない。修道院を出て結婚し、愛人の一人も持たず、あくまで妻もしくは母として生きる彼女たちの人生は、高級娼婦のそれとは明らかに異なる⁽⁷⁾。次に、結婚や夫婦の在り方に関する彼女たちの価値観は大きく異なるのだが、その二人が相手を批判する際に同じ語を用いるのは奇妙に見えるからである。これらの疑問を明らかにするために、ルイズとルネの手紙から、彼女たちがどのような意味でこの語を用いるのかを確認したい。

3-1 ルネの場合：支配と浪費

作中の時系列とは前後するが、まずはルネがどのような点においてルイズを「クルチザンヌ」と呼ぶのかを見ることとしよう。長男の代父母であるルイズとマキユメール男爵の訪問を受けた後、つまりルイズの夫婦関係を実際に目で見た後の手紙において、ルネは二人の関係性につ

(7) *« Courtisane »* の指示対象の射程はかなり広く、Van Der Gun によれば、時代に応じて、娼婦やグリゼット（お針子娘）、踊り子や歌手、女優といった芸術に関わる女性、貴族の愛人として社交界に入り交じる女性等が含まれる（Cf. W. H. Van der Gun, *La Courtisane romantique et son rôle dans La Comédie humaine de Balzac*, Assen : Van Gorcum&Comp., 1963, p.6.）。また、村田京子によれば、『人間喜劇』においてこの語は「売春婦（*prostituée*）」と明確に区別されており、娼婦に限らず様々な階級の女性にも適用される（Cf. 村田京子、『娼婦の肖像—ロマン主義的クルチザンヌの系譜』、新評論社、2006年、5頁）。その意味では、直ちにこの語がルイズとルネに用いられるのも不自然ではないものの、作品タイトルにおいて彼女たちが何よりもまず「二人の若妻（*deux jeunes mariées*）」とされている以上、疑問を付すには十分な違和感ではないだろうか。

いて、とりわけ夫に対するルイズの振舞いについて次のように批判する。

あなたは愛が与えた権力を躊躇わずに発揮しています。あなたの権威は仕草や視線、言葉の調子にも表れています。ああ！あなたのお母様が言われていた通り、あなたはのほせ上ったクルチザンヌです。確かに、私の方がルイより優れているってことを彼はあなたに証明したと思いますが、それでも彼に異論を唱える私を一度でも見た？私は、人前では彼を家庭の権力として尊敬する妻じゃなかった？偽善だわ！とあなたなら言うでしょうけど。

Tu n'hésites pas à exercer le pouvoir que te remet l'amour. Ton autorité s'aperçoit dans un geste, dans le regard, dans l'accent. Oh ! chère, tu es, comme te le disait ta mère, une folle courtisane. Certes, il t'est prouvé, je crois, que je suis de beaucoup supérieure à Louis ; mais m'as-tu vue jamais le contredisant ? Ne suis-je pas en public une femme qui le respecte comme le pouvoir de la famille ? Hypocrisie ! diras-tu. (p.333.)

ルネが問題視しているのは、愛の身を基盤とする夫婦関係である。とりわけ、夫であるマキユメールが結婚前と変わらずルイズを崇拝するように愛していることから、ルネはルイズの愛を「権力」や「権威」と結び付けている。夫に対するルネの母の如き献身を思い起こせば、妻が愛によって夫の上に立つような夫婦関係がルネの目指す家庭像と大きく異なることは、容易に理解しうるものであろう。実際、ルネは夫よりも自身が優れていることを認めながらも、ルイズの態度と対比させるように、家父長制社会の規範に則って夫を立てる妻の姿勢を強調している。したがって、ここで「クルチザンヌ」と言われているのは、ルイズが夫の内に喚起する強い愛の支配力だと言えるだろう。

だが、そればかりではない。ルネは、彼女の家を去ってイタリア旅行を楽しむマキユメール夫妻に追い打ちをかけるように手紙を送る。

フェリペは本心を隠した外交官か、あるいはクルチザンヌに恋して、裏切られると知りながら財産を委ねる男性みたいにあなたを愛しているかです。

Felipe est, ou un diplomate qui a dissimulé, ou un homme qui t'aime comme il aimerait une courtisane à laquelle il abandonnerait sa fortune, tout en sachant qu'elle le trahit. (p.339)

結婚前、母によって踊り子チュリアに例えられていたルイズが、今度はルネによってクルチザンヌの位置に置かれている。そこには、経済的庇護者を必要とするのみならず、その富ごと男性を消費し尽くす女性のイメージがある。直接言及されているのは経済的消費のみであるが、娼婦に入れあげて破産した男性が失うのは、厳密には財産だけではない。社会的地位や評判、一家

の主としての尊敬、個人としてのアイデンティティまで、あらゆるものが脅かされる。そしてルイーズの愛による支配もまた、複数の点で夫を摩耗させている。彼女のパリでの華やかな結婚生活が、このことを明らかにしてくれるだろう。

彼女の結婚生活は二重の消耗を伴う。一方には社交界の花形としてパリに君臨し続けるための多大な金銭的消耗が、もう一方には虚栄と欺瞞に満ちた貴族世界で生きるための精神的消耗が存在する。しかし、この二重の消耗の影響を受けるのは、ルイーズ本人ではなくマキユメールの方である。経済面では、持参金なしで結婚したため、結婚生活における出費のすべては彼の財産によって賄われる。また、結婚後のルイーズの手紙に「私たちがどれほど友情に飢えていること、どれほどフェリペの愛と献身が貴重なことでしょう！どれほどあなたを愛していることでしょう！」*« combien on a soif d'un cœur ami, combien l'amour et le dévouement de Felipe sont précieux ! combien je t'aime ! »* (p.326) とある通り、彼女の消耗した精神を癒すのもやはり夫マキユメールの愛である。要するに、金銭であれ愛であれ、ルイーズがパリ貴族社会で生きるためのリソースは全て夫なのである。だから、最終的に消耗するのは当然マキユメールの方だ。そのためか、ルネはルイーズに次のような忠告を送っている。

無能な男性というのは何だかぞっとするものがありますが、最悪なのは無能にされた男性です。そのうち、あなたはマキユメールを男性の形をした単なる幽霊にしてしまうでしょう。意志を持たず、もはや彼自身でもなく、ただあなたが使うためにつくられた物にね [...]。

Un homme nul est quelque chose d'effroyable ; mais il y a quelque chose de pire, c'est un homme annulé. Dans un temps donné, tu auras réduit Macumer à n'être que l'ombre d'un homme : il n'aura plus sa volonté, il ne sera plus lui-même, mais une chose façonnée à ton usage [...]. (p.322)

「無能な」と訳出した *« nul »* は、契約や法律の文脈では「無効の」という意味をもつ。それは有効性の欠如であり、ルネの文脈に従って言えば、婚姻契約において価値を持たないような男性である。実際、結婚当初彼女の夫はほとんどこれに近い状態にあった。これに対して、「無能にされた男性」で用いられる *« annuler »* は、「無効にする」という意味であり、契約等の効力を後から否定することである。従って、*« un homme annulé »* は、価値を否定され、失った男性といえることができるだろう。これがマキユメールを指していることは言うまでもない。ルイーズによる愛と金銭の浪費が、いずれ彼の意志やアイデンティティをまでをも汲みつくしてしまうことを彼女は予言しているのである。それも、クルチザンヌに入れあげた男性のように、破滅を予感しながらも自ら望んでそうなると言われている。結果的には、マキユメールはこのような運命を辿らずに済むのだが、それは、彼が「男性の形をした単なる幽霊」になる前に病で命を落とすから

にほかならない。

以上のことから、ルネが「クルチザンヌ」の語を使う時、この語は、その愛によって支配と浪費を可能にし、最終的に男性を破滅に導くような女性のイメージを描く。こうした女性像が、ルネの理想とする妻のそれと相容れないことについてはこれ以上述べる必要もないだろう。また、これに加え、社会から距離を取って愛に満ちた二度目の結婚生活を送るルイズに対して、ルネはアンリ四世の重鎮であったシュリ公爵の妻の「私は家庭の名誉ですから、家庭でクルチザンヌの役割を演じることになったらひどく悲しいことでしょうね (p.385)」という言葉を用い、家庭を維持する妻の役割と愛や快楽を与えるクルチザンヌの役割を明確に区別している。彼女にとってクルチザンヌは結婚制度の外に位置するマージナルな存在であり、その点でもやはり妻とは相反する女性と言えるだろう。

3-(2) ルイズの場合：打算と偽善

これに対して、ルイズがルネを「クルチザンヌ」に例える時、そこには夫に幻想の愛を信じさせ、それによって彼を導くようなルネの姿勢に対する批判が認められる。夫ルイからの愛と感謝の手紙を一部引用しながら思惑の成功を誇らしげに報告するルネに対して、ルイズは「クルチザンヌ」の語を用いて批判を返している。

あなたのルイは間違いなく幸せになるでしょう。ルイがあなたを愛しているなら、この点について私は間違いないと思いますけど、きっと彼は気がつかないでしょうね、まるでクルチザンヌたちが自分の財産の利益のために振舞うみたいに、あなたが家族の利益のために振舞っているとは。でも、クルチザンヌたちに対する馬鹿げた浪費を見るに、どうやら彼女たちが男性を幸せにするのは確かみたいね。聡明な夫ならきっとあなたの虜のままでしょうよ。でも、身体にコルセットを必要とする女性と同じくらい虚偽を道徳のコルセットみたいにする妻に対しては、しまいには彼も感謝を感じなくなるんじゃない？

Ton Louis sera sans doute heureux. S'il t'aime, et je n'en doute pas, il ne s'apercevra jamais que tu te conduis dans l'intérêt de ta famille comme les courtisanes se conduisent dans l'intérêt de leur fortune ; et certes elles rendent les hommes heureux, à en croire les folles dissipation dont elles sont l'objet. Un mari clairvoyant resterait sans doute passionné pour toi ; mais ne finirait-il point par se dispenser de reconnaissance pour une femme qui fait de la fausseté une sorte de corset moral aussi nécessaire à sa vie que l'autre l'est au corps ? (p. 260.)

ルネが母性という将来の利益の獲得を目的として夫婦生活を営んでいたことは既に見た通りで

ある。実際彼女は「彼を少しも愛していないとしても、大切にすることはできるように感じます。(p.258)」と述べており、夫に恋愛感情を抱いていない。それにもかかわらず夫に愛という幻想を信じさせておくのは、それが彼女の求める家庭の実現に必要なからである。また別の手紙では、「私の尊敬と愛情を失いたくなければ、彼は次の選挙で県の代議士にならなければなりません」(p.256.)とある通り、彼女が愛を逆手にとって家庭のために夫を誘導していることは明らかである。

だから、ここで「クルチザンヌ」と言われているのは、まさに彼女の目的本位の打算と夫に対する虚偽にはかならない。身体の輪郭を整えるのが本来のコルセットであるとすれば、「道徳のコルセット」とは社会規範に沿って家庭の体裁を整えるための倫理的な口実を指すだろう。既に見てきた通り、ルイズにとって利益や金銭は愛と二律背反のものであるだけに、ルネが偽りの愛をこの道具としていることが、彼女には我慢ならないのである。そのためか、ルイズは別の手紙でもルネの将来設計を「地下工事の予定表」「あなたは木材でも扱うみたいに愛を扱っているのよ！」(p.260)と表現し、その利益目的の性質と搾取を鋭く指摘している。したがって、彼女が「クルチザンヌ」と呼ぶ時、そこに見出されるのは、男性に偽りの愛を吹き込み、狡猾で野心的な女性のイメージであると言えるだろう。

これらのことから、二人とも己の理想とする妻のイメージと相反するものとして「クルチザンヌ」を用いていることが明らかになったように思われる。ルネにとっては、愛によって夫の優位に立ち、消耗させる女性、ルイズにとっては偽りの愛を逆手に夫を通して利益を得る狡猾な女性が描かれていた。しかし、この二つの女性像は本当にそれほど異なるものだろうか。というのも、アルレット・ミシェルがこの二人を「征服の意志において⁽⁸⁾」同タイプの女性としているように、実のところ、夫の内に愛を喚起し、それによって彼を支配すると言う点においては、ルイズもルネもそれほど変わらない。夫を立てる妻として振舞うルネでさえ、愛によって自身が夫を動かしていることを否定しないし、ルイズはとりわけ一度目の結婚においてはその権威性によって愛を享受する。また、二度目の結婚では、無自覚ではあるものの、経済的庇護が愛を権威化していた。したがって、彼女たちが互いを「クルチザンヌ」と呼ぶとき、そこには自身の支配力を社会規範あるいは愛といった各々の価値基準で正当化しつつ、相手に投射して非難する構造があると言えるだろう。

これは W. H. van der Gun による、ロマン主義的なクルチザンヌの定義に部分的に対応するように思われる。彼の定義によれば、クルチザンヌとは「金銭的利益を追求する、あるいはかつてした女性で、またその金銭性を隠したり消そうとしたりする女性」« Le femme qui est ou a été

(8) Arlette MICHEL, *Le Mariage et l'amour dans l'œuvre romanesque d'Honoré de Balzac*, t. IV, Lille : Atelier Reproduction des thèses, Université Lille III, Paris : Diffusion, H. Champion, 1976, p.1331.

vénale, et qui cherche à cacher ou à effacer sa vénalité⁽⁹⁾. »である。無論、ルネもルイズも自ら利益を求めて結婚したわけではなく、従って厳密には« femme vénale »には当たらないものの、自身のクルチザンヌ的性質を相手に投影することによって覆い隠していると言えるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、多かれ少なかれ婚姻契約を通して経済的な交換の構造に組み込まれたルイズとルネが、手紙においてそれをどのように語るかを見てきた。結婚制度自体が持つ経済的あるいは政治的取引の実態、結婚することによって彼女たち自身が帯びる金銭との交換可能性に対する態度の違いは、彼女たちがこれを語る際に使用する語彙やレトリックに現れていた。と同時に、程度の差はあれ、彼女たちは自身が金銭との交換構造に組み込まれたことを意識しながら、一方は母性へ、もう一方は愛へと、その語りを別の物に差し向けることによって自ら別の価値を付与しようとしてもいた。結果的には、ルネが社会の枠組みの中で家庭の母という新たなアイデンティティを見出す一方で、ルイズは愛を強調する自らのレトリックに飲み込まれて命を落とすことになるものの、彼女たちにとって、手紙を書くこと、その中で自身の結婚を語るということは、彼女たちを否応なく巻き込む制度の交換構造への静かな、そして密かな乗り越えの試み考えることが出来るのではないか。「クルチザンヌ」という語は、そうした長い抵抗の間にふと現れる裂け目のようなもので、それは相手に対する批判でありながら、反射して自らの現実にも当てはまるものである。

(9) . W. H. Van der Gun, *La Courtisane romantique et son rôle dans La Comédie humaine de Balzac*, Assen : Van Gorcum&Comp., 1963, p.29.